注意報　注意報　注意報　注意報　注意報　注意報　注意報　注意報

農 推 第２４３２号
令和８年９月９日

関係各位

大阪府環境農林水産部農政室長

病害虫発生予察情報について

標記について下記のとおり発表したので送付します。

－－

病害虫発生予察注意報第６号

１　病害虫名　　コナジラミ類

２　対象作物　　うり科果菜類（きゅうり）、なす科果菜類（なす、トマト）など

３　発生地域　　府内全域

４　発生量　　多い

５　注意報発令の根拠

（１）　８月 18～20 日における施設きゅうり（表１）、露地なす（表２）の巡回調査の結果、コナジラミ類の発生が平年値を大きく上回った。

（２）　大阪管区気象台の近畿地方１か月予報（９月３日発表）では、向こう１か月の気温は平年より高い確率が 70%となっており、今後も多発傾向が続く可能性が高い。

表１　施設きゅうりでのコナジラミ類の調査結果の平年値との比較

	本年	平年	平年値との比較
寄生株率（%）	66.0	28.4	約 2.3 倍
発生密度（頭/葉）	0.96	0.33	約 2.9 倍

注：コナジラミ類の頭数は成虫と幼虫の合計数を示す。

表２　露地なすでのコナジラミ類の調査結果の平年値との比較

	本年	平年	平年値との比較
寄生株率（%）	41.0	9.5	約 4.3 倍
発生密度（頭/葉）	2.18	0.12	約 18.2 倍

注：コナジラミ類の頭数は成虫と幼虫の合計数を示す。

６　生態と被害

（１）　きゅうり、トマト、なすではタバココナジラミ（写真１、２）とオンシツコナジラミ（写真３、４）が発生する。近年大阪府内のこれらの作物での発生種は、ほとんどタバココナジラミである。

（２）　両種とも成虫の体長は１㎜ 程度で翅は白い。幼虫は葉裏に付着しており、体長 0.8～１㎜ 程度の小判型である。また、両種の形態は類似しており、肉眼で区別することは困難であるが、ルーペを用いて成虫・幼虫の形態を観察することで、どちらの種が発生しているか把握できる（表３）。

表３　タバココナジラミとオンシツコナジラミの違い

	タバココナジラミ	オンシツコナジラミ
成虫	・翅を閉じている時、翅が重ならない ・体色は黄色	・翅を閉じている時、翅が重なる ・体色は白っぽい黄色
幼虫	・体色は黄色	・体色は半透明で白っぽく、一部淡い黄色

（３）　成虫及び幼虫が作物を吸汁することにより株が衰弱するとともに、排せつ物に黒いかび(すす病)が生じる(写真５)。また、トマトではタバココナジラミによる果実の着色不良が問題となる。

（４）　大阪府のきゅうりやトマトでは、コナジラミ類が媒介する以下のウイルス病が確認されており、注意が必要である。

①　きゅうり：退緑黄化病（写真６）

・本病の原因ウイルスはウリ類退緑黄化ウイルス（CCYV）である。
・発病初期は、葉に退緑小斑点を生じ、次第に小斑点が増加・癒合しながら徐々に黄化する。症状が進展すると葉脈に沿った部分を残して葉全体が黄化する。
・定植直後から発病し、草勢が低下するため収量が減少する。

②　トマト：黄化葉巻病（写真７）

・本病の原因ウイルスはトマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）である。
・発病初期は新葉の葉縁から退緑、葉脈間が黄化する。その後、葉巻き、縮葉等の症状を示し、生長点付近の節間が短くなって、そう生状態となる。発病後は新芽が正常に生育しない。
・定植直後から発病し、発病後は開花しても結実しないことが多い。

③　トマト：黄化病（写真８）

・本病の原因ウイルスはトマト退緑ウイルス（ToCV）である。
・感染した葉は、葉脈間が退緑し黄斑を示す。その後症状が進展すると葉脈に沿った部分を残して葉全体が黄化し、葉巻症状やえそ症状が現れる。
・病徴は下位～中位葉に現れやすく、生理障害である苦土（マグネシウム）欠乏症と類似しており、判別は極めて難しい。果実への症状は見られないものの、生育が抑制され収量が減少することがある。



写真１　タバココナジラミ
成虫
（体長１㎜程度）



写真２　タバココナジラミ
幼虫
（体長 0.8～１㎜程度）



写真３　オンシツコナジラミ
成虫
（体長１㎜程度）



写真４　オンシツコナジラミ
幼虫
（体長 0.8～１㎜程度）

写真３、４：大阪府植物防疫協会　提供



写真５　なす(葉)のすす症状



写真６　退緑黄化病の被害葉
（きゅうり）



写真７　黄化葉巻病の被害症状
（トマト）



写真８　黄化病の被害症状
（トマト）

写真７：（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所　提供

７　防除対策

（１）侵入防止

・施設栽培では、開口部に目合い 0.4mm 以下のネットを展張する。

（２）薬剤防除

・幼虫は葉裏に寄生しているので、葉裏に十分にかかるように薬剤を散布する。

・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避ける（系統については別添防除薬剤例、病害虫防除指針などを参照）。

（３）その他防除

・コナジラミ類の増殖を抑えるため、ほ場や周辺の除草に努める。また、ウイルスの感染の有無にかかわらず、摘除した茎葉などの残さは放置せず、ほ場外に持ち出し処分する。

・前述のウイルスに感染した場合、治療方法は無い。感染の拡大を防ぐため、発病株はすぐに抜き取り、ほ場外へ持ち出し処分する。抜き取った発病株やその疑いのある株が、ほ場外などで根付いて新たな伝染源とならないよう注意する。

・黄色の粘着トラップ（商品名：ホリバーなど）を設置・観察することにより、コナジラミ類の初発時期や発生量の多少を把握しやすくなる。

・コナジラミ類に対しては、生物農薬や気門封鎖剤(サフオイル乳剤、ムシラップ、オレート液剤等)が登録されている。これらは化学合成農薬の効果が低下したコナジラミ類に対しても効果が期待でき、薬剤抵抗性が発達する可能性が低いという利点がある。

＜別添＞　コナジラミ類の防除薬剤例

作物	薬剤名	系統(IRAC)	希釈倍数	使用時期	使用回数
きゅうり	ディアナSC	スピノシン(5)	2500倍	収穫前日まで	2回以内
	ベストガード水溶剤	ネオニコチノイド(4A)	1000～2000倍	収穫前日まで	3回以内
	アグリメック	アベルメクチン・ミルベマイシン(6)	500～1000倍	収穫前日まで	2回以内
なす	ディアナSC	スピノシン(5)	2500倍	収穫前日まで	2回以内
	コルト顆粒水和剤	ピリジンアゾメチン誘導体(9B)	4000倍	収穫前日まで	3回以内
	ベストガード水溶剤	ネオニコチノイド(4A)	1000～2000倍	収穫前日まで	3回以内
トマト	グレーシア乳剤	イソオキサゾリン(30)	2000倍	収穫前日まで	2回以内
	アファーム乳剤	アベルメクチン・ミルベマイシン(6)	2000倍	収穫前日まで	5回以内
	ディアナSC	スピノシン(5)	2500倍	収穫前日まで	2回以内
ミニトマト	グレーシア乳剤	イソオキサゾリン(30)	2000倍	収穫前日まで	2回以内
	アファーム乳剤	アベルメクチン・ミルベマイシン(6)	2000倍	収穫前日まで	5回以内
	ディアナSC	スピノシン(5)	2500倍	収穫前日まで	2回以内
野菜類	サフオイル乳剤	－	300～500倍	収穫前日まで	－
	ムシラップ	－	500倍	収穫前日まで	－
	オレート液剤（除いちご）	－	100～300倍	発生初期～収穫前日まで	－
	ボタニガードES※	UNF	1000倍	発生初期	－

※ボタニガードESは微生物（糸状菌や細菌など）の生物農薬である。効果的に使用するために以下の注意を遵守する。

注１：本剤の有効成分である菌を定着、活動させるため、散布後15時間以上、90%以上の湿度を保つ。
注２：発生初期に７日間隔で３～４回処理、夕方など湿度を十分に確保できる条件で散布する。
注３：効果が発現するまで１週間～10日程度必要となるため、害虫の発生初期に使用する。

・登録は令和８年９月８日現在
・最新情報は農林水産省「農薬登録情報提供システム」で確認してください。
（https://pesticide.maff.go.jp/）
・これら以外の剤については、Web版大阪府病害虫防除指針も参照してください。
（https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/boujo_shishin.html）